ブエノスアイレス日本人学校における現地語理解教育

―― 日本人学校における実践から ――

前ブエノスアイレス日本人学校　教諭
埼玉県さいたま市立浦和大里小学校　　教諭　　鈴　木　俊　洋

キーワード：スペイン語理解、交流学習、積み重ね、「知る」こと

１．はじめに

日本から見て地球の真裏に位置するアルゼンチン共和国（Republica Argentina）。南米大陸南部の大部分を占めるくさび形の国で、日本から約２万ｋｍも離れている。南半球にあるため日本とは気候が真逆だがはっきりとした四季がある。広大な大地のため、４つの気候（亜熱帯・温帯・乾燥・寒冷）に分けられる。

アルゼンチンの首都はブエノスアイレス（Buenos Aires）で、公用語のスペイン語で「良い空気」といった意味を表す。ブエノスアイレス市とブエノスアイレス州内の東部24行政区を合わせて大ブエノスアイレス圏と呼び、日本人学校はブエノスアイレス市にある。ブエノスアイレス市は、ラ・プラタ川の河口に位置する港町であり、アルゼンチンの政治や経済、文化の中心となっている街（特別自治市）である。国土の１％にも満たない面積に、全人口の７％が生活している。

アルゼンチンでは、スペイン語（イントネーションやボキャブラリーが異なるcastellano（カステジャーノ）と呼ばれるスペイン語）が公用語として話されている。現地で生活しているからには、その国を知るという意味でもスペイン語を学ぶ必要がある。日本人学校でも、英会話の授業のように、現地語会話を学習する時間がある。ここでは、そのスペイン語の授業を生かした特色ある実践について紹介していきたい。

２．現地語の授業に関して

本校には、小学部１年生から中学部３年生までが在籍している。小学部１～４年生は週２時間、小学部５年生以上は週１時間の授業時間がある。現地語会話の先生はアルゼンチン人で、日本語も堪能な先生である。授業の基本方針として、「現地語に慣れ親しむことを第一の目的とし、カステジャーノによるコミュニケーションに意欲と自信が持てるようにさせる」「カードを使ったゲームや遊びを通し、会話の基本パターンを身に付けさせる」といったことを掲げて授業を展開している。習熟度により２つのグループに分けて授業を行っており、一人ひとり手厚くスペイン語学習ができる環境にある。先生は、日本語はほぼ使わず、日本語で子ども達が話しかけてきてもスペイン語で答えるようにしている。子ども達の中にはアルゼンチンや南米の他国での生活が長く、スペイン語をかなり生活言語として使ってきた子がいて、そういった子が積極的にスペイン語を話して授業をリードするといった場面も見られる。

３．現地語会話の授業を生かす実践

(1) 学習発表会でのスペイン語劇

①実践について

ブエノスアイレス日本人学校では、毎年９月に日頃の学習の成果を保護者や外部の方々に発表する「学習発表会」を行っている。その中で、小学部１～４年生はスペイン語による劇を発表している。スペイン語劇の題材については、「かさこじぞう」や「きんたろう」といった日本の昔話や国語の教科書にも載っている「スイミー」など、子ども達の実態やスペイン語の会話レベルを考慮して選定する。内容については、子ども達とも相談をしながらセリフや動作を加え、日本人学校バージョンにアレンジしていく。１学期後半から冬休み、そして２学期の本番までの約２ヶ月間をかけて準備を行う。

普段から授業でスペイン語を学習してはいるが、難しい単語の正しい発音ができなかったり、文の意味理解が不十分であることから文の中での適切な切れ目がわからなかったりする等、練習の最初の段階は特に正しく間違えずにセリフを読むという点に関して苦戦していた。スペイン語の発音や話し方に関する具体的な指導については、現地語会話の先生が中心となって行った。さらには、劇であることから演技も伴うため、低学年の子達にとってはハードルが高かった。しかし、練習を繰り返すことで、見違えるほどセリフをうまく言えるようになり、日常の生活でもセリフのワンフレーズをふと口ずさむ等、子ども達自身も自分の役をものにした。練習の中で、場面に合う動きをどうしたらよいかという点については子ども達からの意見を取り入れ、アレンジを加えより良いものに仕上げていった。

②実践を通して

練習を進めていく中で難しい点も出てきたが、やはり学んだ外国語を自分で話す（使う）という経験は重要であると感じた。「意味は分かっているから理解している」というだけではなく、「意味を理解しその時どういうことを相手に伝えたいからこのように話す」といった、スペイン語を使う場面での状況もある程度把握することができる。スペイン語を活用し、さらには演技をするという表現力も磨きながら、一つの劇を創り上げた。みんなで創り上げることができたという達成感も味わうことができ、子ども達にとって非常に意味のある経験になった。

(2) 交流学習

①イングリッシュ校（Buenos Aires English High School）との交流

ブエノスアイレス日本人学校から徒歩１分の場所にある、現地の私立校である。イングリッシュ校とはもう20年近くも交流が続いており、この交流学習もほぼ毎年実施している。交流を通して、異文化への興味や寛容な心を養うことや、英語・スペイン語を用いて実践的なコミュニケーション能力とその素地を養うことを目的としている。低・中・高学年に分かれ、イングリッシュ校に訪問するだけでなく、日本人学校にも招待してそれぞれの学校で交流を行う。

グループで名札作り

交流の内容については、子ども達の発達段階によって変わってくる。活動例として、中学年の場合は、日本人学校に招待した際には、「名札作り」「新聞紙でかぶと作り」「２人３脚」を実施した。「名札作り」は、日本人学校の子がイングリッシュ校の子にひらがなとカタカナを教えて名前を書いてもらい、名札を作成するという活動である。実際に書いて見せたり、そばでサポートをしたりしながらイングリッシュ校の子が一人ひとり名札を作った。「新聞紙でかぶと作り」は、折り紙の代わりにアルゼンチンの新聞紙を使い、かぶとを折った。折って重ねたり、先をそろえたりするなど、細かいところも伝えた。

「２人３脚」は、グループに分かれて行った。足を出すタイミングをそろえることや足を出すときの掛け声を一緒に合わせて言うことに気をつけるように伝え、同時にチームワークの大切さも体感してもらいながら活動した。

②日亜学院との交流

日亜学院との交流は10年以上続いている。日系人も通っている私立校である。日本人学校の運動会に参加し、交流種目（現地の踊りを踊る表現運動）や徒競走等を行ったり、体験入学として１週間それぞれの学校に入学して学校生活を体験したりしている。日本人学校へは１月に、日亜学院へは３月に行き、時期をずらして行っている。日本人学校への体験入学には、日亜学院での学習成績が上位だった子が選出されてくるようであり、日亜学院の子ども達にとって日本人学校に体験入学に行けるということは非常に嬉しいことだと日亜学院の先生方から伺った。

体験入学では通常の日課を体感してもらう。授業はもちろんのこと、朝の会や帰りの会、授業の開始と終了の号令、掃除等全てである。日本人学校で取り組んでいる活動にも一緒に参加してもらう。百人一首の取り組みや節分の豆まき体験等の学校行事にも同様に参加する。普段のコミュニケーションは、日本語が中心となるが、日亜学院の子の中には日本語があまり話せない子もいる。そういった時には、スペイン語を交えたり、ジェスチャーを加えたり、必要に応じて教師が補助に入ったりする。

百人一首で交流

③実践を通して

現地校に通う子ども達と交流することができるというのは外国に住んでいるからこそ実現できることである。直接お互いに顔を合わせながらスペイン語を使って会話することで、学んだスペイン語を実際に使う経験をすることができるだけでなく、どのような場面で使えばいいのか、話すときにはどのような表情で話したらよいか等の実際に会話してではないと学べないことも学ぶことができる。さらには、同じくらいの年齢の子ども達がどのような会話をしているのかといったことも多少でも知ることができる。

スペイン語を使うにあたって、自信のなさから進んで話すことができなかったり、言いたいことがスペイン語で表現できなくてうまく伝えられなかったりと、子ども達の中でも困ったことが色々と出てきていた。しかし、こうした経験を繰り返すことが、日本語以外の言語を身に付けていく中で大切なことなのではないかと思う。異文化理解にも大きくつながっていくはずである。

(3) 学校生活の中で

学校生活のあらゆる場面でも、スペイン語を活用する場面はある。例えば、日本人学校では安全上、登下校はスクールバスを利用している。現地の学校でも、スクールバスまたは保護者同伴での通学が一般的である。スクールバスには運転手と添乗員が同乗しており、現地の方々である。「おはようございます」や「さようなら」といった日常の挨拶や、安全に連れてきてくれたお礼をする時の「ありがとう」等も含め、スペイン語で行う。また、学校には日本人学校の出入り口を警備する警備員さんや、学校内をきれいに掃除してくれるお手伝いさんも働いている。出会ったときに、しっかりとスペイン語で挨拶することを子ども達には指導する。話すフレーズとしては短いかもしれないが、挨拶をしっかりと行うという点でも積み重ねが大切な実践である。

4. 終わりに

外国語を学ぶにあたって大事なことは、自分自身でその言語を使ってコミュニケーションをとる経験をたくさん積むことが重要だと、実践を通して私は痛感した。学習してその言語のことを「知っている」「分かっている」と思っていても、やはり活用しないと定着に至るには限界がある。その言語を使う上での大事なこと、雰囲気等を実際の体験から学ぶことこそが、その言語を本当の意味で「知る」ことへとつながっていくのではないだろうか。日本でも、外国語（英語）を子ども達に学ばせていく中で、いかにして子ども達に外国語を使う機会を数多く設けていくことができるのかという点に注意を払う必要があると思う。うまくいかないこともあるかもしれないが、そういった経験も含めて子ども達自身が体感することで、より深い異文化理解につながると同時に、今後ますます変わりゆく時代の中を子ども達が成長していく過程できっとプラスに働いていくはずである。